

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

おならは音楽か

1 新年おめでとうございます。横文字で書かれたメニューの食事を食べるのを「横めしを食う」と言いますが、本誌始まって以来の「横文を書く」ことになりました。早い話がSMLと言うのを縦で読むのと横で読むのではかなり感じが違うでしょうし、英語の綴りを縦に読むには首を右に90度曲げなければならないからで、読者の頸湾症を予防する効果も期待できます。

さて、このSML理論について少しお話を進めましょう。最近音楽教育の現場では「創って表現する」などという言葉が横行しています。実際にその授業なり研究論文等を拝見しますと、手作りの楽器と称してペットボトルに砂を入れたマラカスや新聞紙を丸めたものなどそれぞれ廃品回収の対象をターゲットとしたものを利用して「音」を出すことを「創って表現する」と言っているような風潮も見られます。この「捨てても良い」「壊れても良い」ものを利用したアバンギャルドな技法は「残す必要のない文化」として20世紀半ばに出現しました。

学校で学ぶべき学習内容や学習経験は「残す必要のない文化」ではなく、「残さなければならない文化」だと筆者は思うのです。この「文化」という言葉は「○○文化ホール」や「文化祭」などに使われますが、《文明が進んで生活が便利になること》《自然の反対語で、真理を求め常に進歩向上をはかる人間の精神的活動》などの意味が国語辞典には出ています。かつて芥川也寸志氏が「文化とは生き甲斐のことである」との名言を残しておられるように、文化と言うのは辞書的な意味だけではなく親から子供へ、そして人生の先輩から後輩へ受け継がれる「生き甲斐」のことだと思うのです。

だとすれば使い捨てのペットボトルを利用した「使い捨ての教材」はその場限りの活動をしたに過ぎず、「生き甲斐」を啓示されたり教えられたりしたわけではないのです。このように、今の教育現場では「音」と「音楽」と「文化」の区別が判然として居ません。学校でしか学べない或いは学校でしか経験できない学習をこの「音」と「音楽」と「文化」のそれぞれの切り口できっちり押さえなければならぬと痛感したのがこのSML理論の最初でした。

我々が口にする食べ物「食材」の吟味、そして「加工・調理」を経て「食事」という日常行為になるわけですが、この「食材」にあたるのが「音・音響」で、「調理・料理」にあたるのが「作品や演奏」であり、「食事」にあたるのが「鑑賞・表現の行動」なのです。「音」が出れば何でも

「音楽」というのは「口にさえ入れれば何でも食事」と言っているようなもので、「活け造り」と「丸かじり」の区別もない酷い考え方なのです。

「自然」の反対語が「文化」であると辞書には出ていますが、現代の高度な機械文明はもはや等身大の文明ではなく、電話がそうであるように殆どの人間関係すら一度電気信号に置き換えられ、間接的にしか伝わらなくなってしまったのです。だから文明に反対するグループがあちこちにいます。佐守信男はこの我々の文明の結果としての現状を「人間の歴史的自然」と言って自然に対立する言葉としては捉えていません。この現代文明も人間にとっては自然なんだと言う考え方は受け入れざるを得ないひとつの現実であると同時に、より快適で幸せな人生が送れるよう人間は歴史的自然を創っていけると思うのです。

さて「おなら」は「音楽」でしょうか。「おなら」は自然そのものです。しかし、自然の中には制御や回避されるべき大雨や洪水、干ばつなどがあるように、「おなら」も通常は付随する臭気を回避するため単独で音響だけを用いることはしません。かつて都市センターホールで行われた「おなら」のコンサートはインパクトはありましたが、食事の時には思い出したくない光景でしたし、「へ」調かどうかは知りませんが、それほど美しい音でもなかったし、特に湿り気が入ると嫌悪感すら憶えた記憶があります。

マリー・シェーファー(男性です)などが提唱するサウンド・スケープ(空から見る地形ランド・スケープをもじったもの)はあるがままの自然音のある時間帯だけ切り取って音楽であると言います。フラクタル理論によるある種の乱数で次々と音を鳴らすコンピュータ・ミュージックもあります。

今、教育現場を混乱させているジョン・ペインターのと言うよりその翻訳者坪能由紀子氏らの提唱する現代音楽的手法による音楽教育も、「意図して」何かの音を発生させるのではない、ただ出したいから出すと言うあたりにお構いなしの「おなら」のような行為を来る日も来る日もやらせようとしています。SML理論ではまずS即ちSound或いはSonicの意味する素材としての「音」の教育を体系化しようします。「音」さえ鳴れば「音楽」という立場をはっきりと否定します。無意味な行き当たりばったりの「使い捨て授業」を否定します。自然は善であるという哲学を否定します。文化(生き甲斐)としての音楽を成立させる音の学習がSの教育のねらいだからです。